巻頭言

富家町一番地

1, Tomiya-cho

大河原謙二郎*

Kenjiro OKAWARA*

表題は、当社東海金属の本社の所在地であるが、あやかりブームで一躍有名になった、かの北海道の「幸福駅」や「愛国駅」と比べても、決して引けをとらない縁起のいい名称ではなからうかと自負している。

名刺を取り交した初対面の方から「これは結構な地番ですな」とおほめに預かることも間々あるのである。

昨秋此処に当社が、予てから進めて来た一群の再開発計画「トーカイプラザ」が完成し、駅前（東神奈川駅）市街地の中心として、現在は御陰様で賑いを見ている。

ところで、此の富家町1番地であるが、そもそもは、東海金属が金属箔加工業として、長年に亘り生産を営んできた金属箔圧延工場の跡地であり、その歴史は古く六十有余年にもさかのぼる。従つて此処には金属箔圧延に関する数々の物語りが秘められていて、見方に依つては、我が国ス業界発展史の一場面を示す、興味深い歴史的跡地と言ひ得るのである。

大正時代に於ける金属箔の主流は、言う迄もなく錫鉛系であり、平板圧延（ブック法またはバック法）から始まり大正8年に至つて、初めて長尺巻取圧延ができるようになった。当時金属箔の用途は主として茶箱の内貼や煙草の包装用等であつたが、当社がこれらの箔の素材をアルミニウムへ転換しようと研究に着手したのは昭和4年であつた。同5年にはアルミ箔生産に関する研究に対して商工省から奨励金の交付を受け、また一方ドイツのシュミット社から圧延機、その他一式を輸入して昭和6年に至り、我が国としては初めてアルミ箔の生産に成功したのである。そしてこのことが契機となつて煙草、菓子等の包装は漸次錫、鉛からアルミニウム箔に転換して行くことになる。ちなみに煙草に初めてアルミ箔が採用されたのは、昭和8年春であつた。此の頃が、言わば我が国アルミニウム箔工業の黎明期とも言える時期であるが、半世紀後の今日から見ると技術的には誠に隔世の感があり、関連した逸話が当社の社史の中に数多く見られる。その一つに、次のような話がある。

当時も箔圧延に圧延油が重要な役割を果たしていたことは現在と同じであるが、参考にする文献が内外とも殆んどなく非常に苦勞したあげく、たまたま見付けた、外国文献に『アルミ箔の圧延には、“old oil” が使用される』と一行あるのを見つけ、これを「古い油」と直訳したのだから大騒ぎの一幕を演ずることになったと言うのである。文献に基づき、当時圧延油として最も多用されていた変圧器

* 東海金属株式会社取締役社長（横浜市）。Tokai Metals Co., Ltd. (Yokohama).

油（勿論新油）の代りに古い変圧器油を集めてきて試用したところ誠に調子が良く、品質も良いと言う結果を得た。かくてアルミ箔圧延には、『「古い油」にしくはなし』と言うことで、全国で使用する変圧器油の量を調査したり、新旧油の交換の頻度や集荷方法などについて、大真面目、且つ大掛りで検討調査したのであった。結局は「古い油」の集荷不可能なことがわかり、それではと言うので新油を何らかの方法に依つて変質させようと研究した結果、新油を加熱ボイルしてから使うと「古い油」と似たものを得ることを知り、鬼の首をとつた様に喜んだと言うのである。

今から五年前、私は富家町の圧延工場を地方（蒲原）に移転すると決めた時、此の跡地を売却すると案もあり、またそれが最も安易な道であることは、わかりきったことであった。しかしあえて労苦の多いであろう自社に依る跡地再開発事業に踏み込んだのは、1つは此の様な先人の金属圧延に打込んだ、いくつかの足跡が深く刻まれている此の土地に去り難い愛着を覚えたからである。蒲原の新工場は、総てスクラップアンドビルドの合理化工場であるが、私は創業当時の旧圧延機1台は決してスクラップ化しない様にして大切に工場の片隅に保管させてある。そして、何れかの日、磨きあげ化粧もし直して同機がかつて活躍したであろう此の富家町1番地の土地に里帰りをさせ、台座にのせて「アルミ箔工業創業の史跡」として大切に後世に残したいと念じているのである。